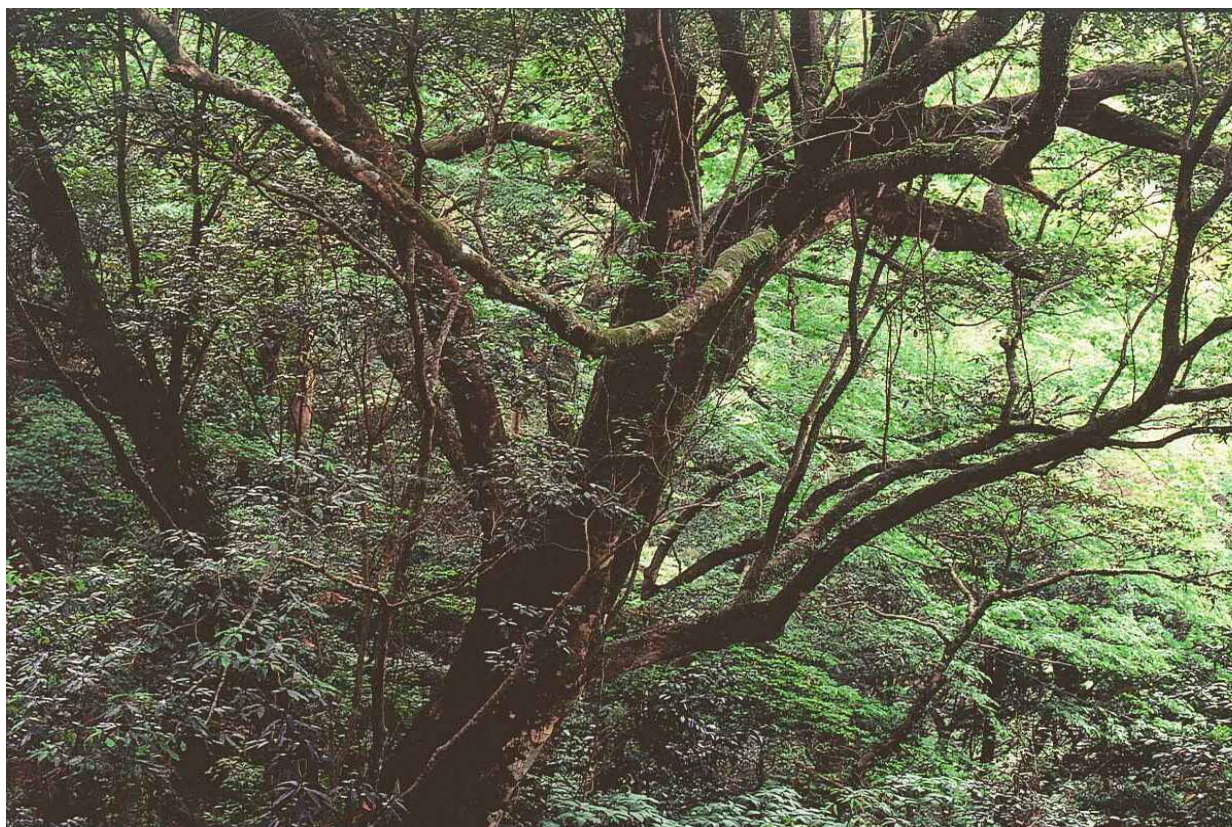


照葉樹林だより

ISSN 1880-8794

てるはの森の会 会報第 21 号
2010 年 2 月 15 日



冬の照葉樹林 冬、綾の照葉樹林は眠っているのか、それとも初夏のエネルギーを蓄えているのか。川中の過酷な環境の中で細い枝を伸ばして春を待つカシの大木。 撮影 坂元守雄

《 目 次 》

- ★ 綾の照葉樹林プロジェクト事業説明会
- ★ 森を守ろう！親子でエコツアー
- ★ 照葉樹林の蝶たち ～生き続けるためには～
- ★ 第 4 回 照葉樹林研究フォーラム 報告
- ★ 第 2 回 調査研究ワーキング・グループを開催
- ★ お知らせ 「国際照葉樹林サミット」
- ★ 事務局だより

発行：てるはの森の会
〒880-0014 宮崎県宮崎市鶴島 2 丁目 9-6
みやざき NPO ハウス 403 号
TEL 0985-35-7288 / FAX0985-35-7289
E-mail: teruha@miyazaki-catv.ne.jp
URL: <http://www.teruhanomori.com>



「綾の照葉樹林プロジェクト事業説明会」を開催しました



昨年12月7日夜、綾町高年者研修センターで、「平成21年度綾の照葉樹林プロジェクト事業説明会」を開催しました。説明会はこれまで2回地元町民に向けて実施してきましたが、初回に比べ、少しずつ町民の参加者が減ってきているのが悩みでした。

そこで、今回はテーマを「照葉樹林プロジェクトと地域の暮らし～町民が参加するさまざまな活動～」とし、町民にプロジェクトをもっと身近に感じてもらい、自分たちの暮らす町の地域づくりの一環としてのプロジェクトだとの意識を持ってもらえるよう企画しました。

開会にあたり、前田穰綾町長と笹岡哲也宮崎森林管理署長があいさつし、その中で綾の照葉樹林の価値、照葉樹林を保全し、その価値を多くの人に伝えることの大切さを呼びかけました。

プロジェクトの活動については、1年間の活動概要を報告した後、町民参加で実施した4つの活動、①復元のための林床調査・間伐作業、②げんだぼの森づくり、③上畑ふれあい調査、④地域づくりワーキンググループ・都市住民との交流について、活動を企画運営した人と、参加者の双方から報告しました。

参加者からは、「はじめは、活動の意義もよく分からず戸惑いながら参加したが、活動を通して地域の人やプロジェクトの担当者と話したりする中で、地域のことも知らなかったことに気づいたり、改めて良さを再発見したり、プロジェクトへの理解が深まった」との感想や、プロジェクトと関連して「元気な子どもたちを育てなければならない」といった地域への思いが語られました。また「もっと多くの町民が参加できるように工夫してほしい」といったプロジェクトへの要望も出されました。

プロジェクトへの質疑応答の後、会のまとめとして、上畑ふれあい調査に専門家として参加している東京大学の鬼頭秀一さんから「自然を回復する取り組みは全国各地で行われているが、報告にあったように地域の人たちが参加して、地域に根付いてやっといこうという所は少ない。意義ある活動」とエールをいただき、閉会しました。

説明会で出された意見や要望は、活動に反映させ、さらに地域に根付いたプロジェクトを目指したいと思います。

(財)日本自然保護協会 開発法子



森を守ろう！親子でエコツアー

編集ライター / ポラリティセラピスト 藤原聖津子

宮崎県綾の森のツアーに参加し、カヌー、ネイチャーゲーム、じゃがいもの収穫、間伐作業とたくさんの貴重な体験をしました。応募のきっかけはWeb検索です。「綾の森」「間伐作業体験」という言葉に惹かれました。我が家は3姉妹のいる母子家庭。時間的にも経済的にも厳しいのが現実です。こども富士登山キャンプに参加しいっしょに登頂したり、和歌山県串本でシュノーケルをしたりなどいろいろ試みてはいますが、九州まで足を伸ばす機会はありませんでした。3姉妹の中で一番しっかり者の次女に、ママと1対1の体験ツアーをプレゼントできることもうれしく思いました。

到着後すぐに山道を移動するのではなく、まず昼食を用意していただいたことや、盛りだくさんのプログラムの様子から、スタッフの方々の心遣いを感じました。どのプログラムも楽しく、書きたいことはたくさんありますが、メインの間伐作業について書きたいと思います。

森を守ることと間伐作業という繋がりが、すぐにピンと来ないのは、私の知識不足でした。今回伐採したのは、杉です。杉や檜という“価値のある樹木”を植林して増やしてきたのは、人間。そのために、日本の総森林面積の50%ほどあった照葉樹林が消えて、現在1.6%にまで激減していること。杉や檜を間伐することによって、そこに空間が生まれ光が山を照らし、そして、本来あるべきはずの、地中に埋もれた照葉樹林の種や実から小さな芽が顔を出すということ。1年で5cmぐらいの木になり、2年で10cmぐらいの木になり……と、ゆっくりゆっくり、本来ある姿に戻っていくということ。

お話を伺い、この活動を始められた方に尊敬を感じ、また、とても哲学を感じました。これまでとは180度違う方向転換という大きな決断をされたこと、ありのままの姿を尊重するということ、待つということ、リアルタイムには結果は出ないことなど、すべて、人生とも重なります。人間も“金銭”という大きなエネルギーを生み出す人が“価値のある人”として賞賛されやすいのですが、本来はすべての人の命が貴いはず。そんなことも思いながら言葉を受け止めました。また、照葉樹林は、もこもことしてブロッコリーのようなことで、『まんが日本昔ばなし』に描かれる山を思い出しました。

ツアーから帰宅して、娘はいろいろな木を見る度に「あれも照葉樹かな？」と気になったり、「杉の木はすごく硬かったよ！」と先生や友達に話したりしています。

刺激を受けて調べてみました。照葉樹林は木の実がたくさんあるので、鳥や鹿、イノシシなどの食物連鎖にも繋がることや、針葉樹林に比べて山火事に耐性があり、降水が川に流れ出すスピードが緩慢であるなどの利点があるということなど、その大切さを再認識しました。(スタッフの方々が説明をしてくださっていたことと重複しているかもしれませんがね)そして、近年、花粉症の原因とされるのは杉や檜。地球からのメッセージというのは、いろいろな形で現れているのですよね。

森の姿が戻るころには私はこの世にはいませんが、何らかの形で地球を守る活動をしていこうと再決意をした次第です。綾の森にも必ずまた訪れたいと思います。できれば移住して自然の中で子育てしたいです(笑)

切った杉の木のかげらをいただいてきましたが、とってもいい香りです。娘にとっても私にとっても、素晴らしい機会でした。もっとゆっくり森の中で過ごしたかったぐらいです。ツアーの翌日は、私の誕生日。少し早い素敵なプレゼントをいただけた気がします。この活動に関わるすべての方に心から感謝いたします。 <http://www.takara-pew.com/>





照葉樹林の蝶たち

～ 生き続けるためには ～

宮崎県昆虫同好会 中尾 景吉



私たちが生活している住宅周辺には多くの蝶がいて、四季折々に形や色彩の異なった蝶たちが飛び交い、私たちの目を楽しませてくれます。また、耕作地周辺、ちょっと入り込んだ森や林、池のまわり、川沿いの堤防など、人家周辺とはちがう蝶がおり、さらに、原生林のような深い森林の中にも、そこにしかない蝶が生息しています。このように、場所によって生息している蝶の種類が違うのは、種類により生存する条件が異なるからです。

蝶が生息できる条件として重要な要素がいくつかあります。

まず、生きるために必要な「えさ」があるということです。蝶の一生の中で、幼虫期には特殊な種を除いて、殆どの種が植物の葉や花を食べます。しかし、種類によって食べる植物が違います。だから、人家周辺と森林では、植生が違うために、生息している蝶の種類も違うということになります。それで、照葉樹林の中には、照葉樹林を形成する植物を食べる蝶しか生存できないということになります。

次に、種類によって、それぞれに生存に適した温度や湿度があるということです。高い温度の環境を好む蝶がいたり、低温を好む蝶がいたりします。よく乾燥した環境を好む蝶や、じめじめとした環境を好む蝶がいたりします。

さらに、日当たりのよいところを好む蝶、日陰を好む蝶、明るい場所を好む、薄暗い場所を好むなど、種類によって異なります。

だから、照葉樹林の蝶といっても、山の麓、中腹、山頂近く、溪流沿い、南東斜面、北西斜面などで、生息している蝶の種類は違ってきます。

ウラキンシジミという蝶は、日本だけに生息している日本特産種です。北海道から九州まで広く生息していますが、暖かい宮崎県では九州山地沿いの標高の高いところに生息する山地性の蝶です。そして、小林市の須木から綾町にかけての照葉樹林内が日本の生息地の南限で、これより南には生息していません。従って、綾の照葉樹林の蝶ということでは、極めて貴重で、且つ、重要な蝶ということになります。

1975年頃、掃部岳中腹の溪流沿いでこの蝶の生息が確認されました。山道から急傾斜の斜面を、木を伝いながら降りた、全く人の近づかない、うっそうとした樹林の中の急流の沢沿いにひっそりと生息していました。生息の範囲を調べようとしても、沢の地形があまりにも厳しくて、素人の我々には歩き回ることもできず、はっきりとした生息域を確定することはできませんでした。

この唯一の生息地では、私は、1982年までは継続して生息を確認していますが、この頃、生息地一帯の伐採計画が進められていることを知りました。同好者の一人は、関係機関等に、ここのウラキンシジミの貴重性・重要性をお伝えし、伐採への配慮をお願いしました。そして、伐採は水域の少し上で止めていただくことができました。このような、一昆虫のために生態系を壊さないというご理解と、作業の一部変更ということは、当時としては極めて異例のことではなかったかと、本当に有難く感謝いたしました。





しかし、残念なことに、生息環境が残されたにもかかわらずこのウラキンシジミは姿を消したのです。

姿を消した理由については科学的に立証することはできませんでしたが、蝶の生息できる条件からいくらかの推測を仲間内でしてみました。それは、

「一帯は伐採されていないので幼虫の餌となる食樹がなくなったわけではない。変わった条件は、溪流の上の斜面の樹木はなくなった。そのために日照量・日照時間が変わり、それにより、付近一帯の温度が高くなった。当然、空中湿度は低くなり乾燥してきた。樹木がなくなったので風通しがよくなった等々……。これらの環境変化によってウラキンシジミはこの場所では生息できなくなった」

このように消えた原因は推測しましたが、では、ウラキンシジミは綾の照葉樹林では絶滅したのでしょうか。このことも確認はできませんが、おそらく、広大な綾の照葉樹林の中に新たな生息地を見つけて、そこで生き続けていると信じています。

綾の照葉樹林を守り育てる活動は、その森林に依存して生きている多くの動物たちも守られるということです。ウラキンシジミを始め、照葉樹林の蝶であるキシマミドリシジミも、ルーミスシジミも、ヒサマツミドリシジミも、きっと、この活動に守られて、綾の照葉樹林の中で生き続けることができていると確信しているのです。



森林総合研究所と共催！

第4回 照葉樹林研究フォーラム 報告

身近な照葉樹林について調べている人がたくさんいるのに、お互いの成果を共有する機会がないということで始めた研究フォーラムですが、一般の人にも聴いてもらう集まりにしたことで、回を重ねるごとにスケールの大きなフォーラムになってきました。今回は、綾町の大森岳に20年前に調査地を設定して、照葉樹林のことを詳しく調べてきた森林総合研究所との共催になりました。照葉樹林研究の第一人者である山本進一先生の講演に始まり、樹木と動物の関係（小南陽亮）、照葉樹の葉はいつ落ちるのか（佐藤保）、照葉樹林の文化社会的な側面（湯本貴和）と続き、内容の濃いフォーラムになりました。午後からの研究フォーラムに先立ち、午前中に森林総研の公開シンポジウム「九州の森は今・・・」も開かれました。自然の森も衰えるのか（田内裕之）、森は自然に再生するのか（伊藤哲）、再生する場所は予測できるのか（小田三保）、シカは再生を妨げるのか（野宮治人）。森づくりの活動をしている人には、興味の尽きない話題でした。こうした地道な研究成果を実際の森づくりに活かすために、私たちも地道な活動を続けていかなければいけません。（2009年11月21日（土）開催、宮崎市民プラザ、参加者約100名）

照葉樹林研究フォーラムに参加して

11月に開催されたフォーラムに参加させていただいた。講師の先生をはじめ、開催関係者に感謝している。このような会に参加する度に、このような経費と関係者のモチベーションはどこから出ているのだろうと思ってしまう。ただ、このような問題にあまり立ち入るとそのうち関係者の仲間になってしまいそうなので、あまり考えないことにする。

私は、20数年前から開催された、シンポジウム等にほとんど参加してきた。その中でも今回の午前午後を通した学習会は充実した内容だったと思う。内容が具体的で私のような素人にも分かりやすいものだった。

特に最後の講義での“ブナ林帯の自然の恵みと照葉樹林地帯の栽培作物中心の違い”の話は、生活体験の上で直接的な照葉樹林の恵みを実感できていない私には納得のいく話だった。

これまで多くのことを教えていただいたが、私の中ではまだ知識が断片的にあるのみである。これらの知識を増やし、繋ぎ合わせる努力が私自身の課題だと最近思っている。

綾町 黒木政則

11月21日、午前中に行なわれた公開シンポジウムの中で、「人工林伐採後自然に森は再生するか」「自然再生が可能な場所」等の話があった。綾の照葉樹林プロジェクトでは、スギ・ヒノキの人工林を列状間伐し、照葉樹林の再生をはかろうとしており、大変興味深い。再生が遅れる要因は、①人工林となる前がカヤ場等の原野であった②種子源の母樹が周りにない③人工林の手入が悪かった、であるという。再生材料である種子や、萌芽の連鎖が絶たれていると再生が遅れるということである。私のいくつかの森づくりの経験からも、①と②が原因と思われ、なかなか自生木が森に育たないフィールドがある一方で、「わくわくの森Ⅰ」のように、母樹が周りにあり、手入を尽くしたため日当たりが良く、植栽木もさることながら数多くの自生木が生え、順調に再生した場所もある。上記の再生阻害要因に対して綾の森はどうなのだろうか。また、列状間伐程度の日当たりで果たして再生していくのだろうか、懸念を捨てきれないでいる。水源の森づくりをすすめる市民の会 前原満之



綾の照葉樹林プロジェクト

第2回 調査研究 ワーキング・グループ を開催

開催趣旨： 調査研究ワーキング・グループの設立の経緯やその趣旨についてはすでに 16 号で報告しましたが、2009 年 12 月 4 日に第二回の会議が開催されたので、その内容をご紹介します。参加した委員は 5 名（伊藤、大澤、河野、高木、西脇）でした。九州森林管理局では「綾の照葉樹林プロジェクトにおける照葉樹林復元事業の基本方針」という施業実施のガイドラインを作っていますが、九州森林管理局の内部資料であり、事務局会議（調整会議）では専門的な検討ができなかったことから、これまで外部の専門家によるチェックが行われてきませんでした。今回は、どのような施業方法が、どこで、どのような方針の下に決められているのか、またその判断基準が妥当なのかについての議論されました。

基本方針： 基本方針には、道がかりがよいか悪いか（林道に近いか遠いか）、30 年生未満か以上か（材として利用できるか）、針葉樹と照葉樹の林冠における混交状態（照葉樹の侵入状況）、林床の実生や稚樹の侵入状況によってどのような復元方法をとるのかという、施業の基本方針がまず記述されています。施業は林小班（施業実施の際に都合の良い小さな区画、林小班がまとまると林班になる）ごとに実施されます。綾のプロジェクトでは、植樹によらず間伐（人工林を部分的に伐採すること）により、人工林の林床に光を入れて照葉樹の侵入を促すという原則があるので、間伐率の設定が問題になります。

間伐方法： 間伐したスギやヒノキが木材として利用できるのであれば、伐り捨てておくのではな

く、活用していくことも考えていかなければなりません。最終的に照葉樹の自然林にするのなら人工林を皆伐してもよさそうですが、広く伐採すると一時的に草地になります。増えすぎて問題となっているニホンジカを誘導することにもなり、場合によっては逆効果になってしまいます。そこで、伐採率をシカの影響を受けない最大の比率に設定する必要があること、伐採方向を斜面の下方方向に対して斜めにして伐採面へのシカの侵入を防ぐといった案も出されました。一方、水源涵養などの森林の公益的機能を発揮するための林小班（保安林）が数多く指定されており、ここでは伐採率が 30%に規定されているため、間伐率を抑える必要があります。しかし、自然林が近い林小班で大きく伐採しても、人工林に囲まれた別の林小班で伐採率を小さくすれば、林班全体で 30%にできるといった裏技があることもわかりました。そうした詳細なガイドラインが現場には必要だろうとの意見がありました。

広葉樹林化： 森林総合研究所では、「広葉樹林化」研究プロジェクトが推進されていることが伊藤教授から紹介されました。ここでは、①更新を予測する技術（計画策定）、②誘導技術（復元方法）、③技術の総合化と情報発信（評価、検証）という 3 本の柱で実施されています。今回の基本方針は②に関するものですが、綾の照葉樹林プロジェクトでは①や③を含む照葉樹林復元のためのマスタープランの策定が必要だろうとの提案がなされました。今後の進捗にご注目ください。

（財）日本自然保護協会 朱宮丈晴

「国際照葉樹林サミット」

●時：2010年5月22日（土）～23日（日） ●場所：綾町公民館文化ホール
5/22(土) <午前>受付 9:30～ 参加費 500 円（資料代）

- ① 開会 10:00～
- ② 基調講演 10:10～（国内外の照葉樹林の現状と歴史についての講演）
 - (1)大澤 雅彦 氏(マラヤ大学教授)
 - (2)国外研究者(中国科学院：魯 元学 氏、雲南大学：金 少萍 氏
ブータン農業省：ペマワンダ 氏)

<午後>13:15～

- ③ 分科会でのテーマ別討議
 - ・照葉樹林の生物多様性と文化
 - ・照葉樹林の多面的な機能と保全利用
 - ・照葉樹林を軸とした地域づくりと市民参加
 - ・体験分科会（親子で作る木工教室）

他、ポスターセッションや全体討議をおこない、大会宣言を発表します。

5/23(日) 現地見学会 9:00～13:00 参加費 1,000 円（バス代・保険代） 6種の綾の森見学コース。

※詳しくは照葉樹林だよりの次号でご案内します！

△▽△▽△▽△▽△▽△▽ 事務局だより △▽△▽△▽△▽△▽△▽△▽

◆第3回げんだぼの森草刈り作業
を行いました♪

「げんだぼの森草刈り作業」3回目を10月31日（土）10時から行いました。26名の参加があり、約2時間の作業で1mほどの草に埋もれていたクスギ・コナラ・クリなど幼樹が姿を



現しました。大変な作業、ご苦労様でした！

◆照葉樹林研究フォーラムの要旨集を「照葉樹林だより」に組み込みます！

照葉樹林研究フォーラムは、2007年以來4回開催されてきました。いずれも参加者に好評で、毎回、話題提供者に執筆してもらった要旨集も作成しています。その内容を論文に引用したいという要望があったので、「照葉樹林だより」の一部に組み込むことにしました。表紙上部にあるISSN番号や号数・ページ数を国立国会図書館へ知らせて文献請求できるようになります。

- 第1回(2007年)照葉樹林研究フォーラム要旨集
→「照葉樹林だより」17号 2009年発行
- 第2回(2008年)要旨集 →同18号 2009年発行
- 第3回(2009年)要旨集 →同19号 2009年発行
- 第4回(2009年)要旨集 →同20号 2009年発行

最初2回の要旨は開催年と発行年がずれてしまっていますが、いずれも2009年発行にします。「照葉樹林だより」の前号が16号で今号が21号なのは、このためです。詳しくは、てるはの森の会へお問い合わせください。

照葉樹林だより21号（2010年2月15日発行）

◆「てるはの森の会」関連行事

- 11月5日(木)地域づくりWG
- 9日(月)市民ボランティア林床調査
- 10日(火)サミット準備会・連絡調整会議
- 21日(土)照葉樹林研究フォーラム
- 24日(火)てるは定例会
- 27日(金)～29日(日)
木の家だいすきの会綾体験ツアー
- 28日(土)・29日(日)ピザハット親子体験ツアー
- 30日(月)綾プロ連携会議・サミット実行委員会
- 12月3日(木)地域づくりWG
- 1月12日(火)照葉樹林文化館協働委員会
てるは定例会
- 14日(木)連絡調整会議・サミット実行委員会
会・地域づくりWG
- 1月17日(日)～19日(火)ヤンバルの森視察
- 26日(火)照葉樹林文化館協働委員会
- 2月 2日(火)熊本林業土木協会から寄付

会員募集中！

「てるはの森の会」では、綾の照葉樹林プロジェクトにご協力いただける会員を募集しております。

年会費	個人サポート会員	2000 円
	家族サポート会員	3000 円
	団体サポート会員	5000 円
	法人サポート会員	10000 円

会員になっていただくと、照葉樹林やプロジェクトに関する情報を掲載した「照葉樹林だより」を年4回お届けします。プロジェクトが実施するイベントや各種行事に参加できます。詳細は事務局までお気軽にお問い合わせください。

協賛企業

